敷島町文化財調査報告　第22集
（山梨県）

御岳田遺跡 II

民間店舗建設に伴う平安時代遺跡の発掘調査報告書

2004

敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会

敷島町文化財調査報告　第22集
（山梨県）

御岳田遺跡 II

民間店舗建設に伴う平安時代遺跡の発掘調査報告書

2004

敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会

序　　文

敷島町は、甲府盆地の北西部にあり、北部は山間地帯で、盆地に面した南部は荒川の扇状地形となっています。近年では、南部地域を中心に開発が多く、緊急の埋蔵文化財の発掘調査が頻繁に行われてきております。

本町は、南側の扇状地上に多くの遺跡が確認されており、大昔から人々が生活するのに適した環境であったと思われます。

これまでに多くの遺跡を調査してきましたが、敷島町を代表する遺跡には弥生時代の『金の尾遺跡』や白鳳時代(7世紀後半）の県内で最も古い瓦窯となる『天狗沢瓦窯跡』などが上げられます。

さらに、最近の調査では古代の大集落跡である『松ノ尾遺跡』などの発掘により、本町周辺は当時の甲斐国の中で重要な地域の一つであったことが徐々に明らかとなってきています。

このたび報告することとなった御岳田遺跡は、平成４年にはじめて調査（第Ⅰ次）がおこなわれ、古墳時代、平安時代の住居跡や土坑群などが発見されたことから本町南部の西側地域においても、古くから連綿と人々が暮らしていたことが明らかとなりました。

今回の第Ⅱ次調査では、平安時代の住居跡４軒、竪穴状遺構１基、土坑１基、溝状遺構３条などが発見されましたが、約100㎡の調査でありながら非常に密度の高い遺跡であることが判明しました。

本報告書が、わが町、わが郷土の歴史研究の一助となるよう切に願うとともに、これからも調査・記録を精密に行い、さらに教育普及へと役立てるよう努力してまいります。

最後に、開発者である保坂広昭氏の文化財保護に対する深いご理解の下、調査が実施できましたことに大いに感謝するとともに、ご指導、ご協力いただきました関係各位に心より厚く御礼申し上げ、序といたします。

平成16年5月

敷島町教育委員会
教育長　**山　口　正　智**

例　　言

1．本報告書は、山梨県中巨摩郡敷島町大下条地区に所在する御岳田遺跡の発掘報告書である。

2．本調査は、店舗建設に伴い実施した発掘調査で、調査面積は約 100 ㎡である。
発掘調査から報告書刊行までの経費は、開発者である保坂広昭氏が負担した。

3．発掘調査は、平成 8 年(1996 年) 10 月 15 日～21 日まで行った。その後、整理作業は断続的に行った。

4．発掘調査および整理作業にあたった組織は、次のとおりである。

調査指導・主管	敷島町教育委員会	
調査主体者	敷島町文化財調査会	
調査指導担当者	≪発掘調査・整理調査≫	大嶌正之(敷島町教育委員会生涯教育課社会教育係副主査)
	≪整理調査≫	小坂隆司（敷島町教育委員会生涯教育課社会教育係嘱託）
調査事務局	敷島町文化財調査会	

5．発掘作業は大嶌が調査指導を担当し、整理作業は大嶌・小坂の指示のもと、石川弘美、長田由美子、小林明美、関本芳子でおこなった。
本報告書中、遺跡全景および遺構・遺物写真の撮影は大嶌が担当した。本書の執筆、編集は小坂が担当し、全体校正を大嶌が行った。

6．調査ならびに報告書作成にあたり、次の方々より御教示をいただいた。ここにご芳名を記し、感謝申し上げる。
中込司郎、坂本美夫、羽中田壯雄、飯野正仁、畑　大介（敷島町文化財審議会）　（順不同、敬称略）

7．発掘調査ならびに整理作業参加者
浅川松子、飯室久美恵、石川弘美、長田由美子、尾澤玉枝、小林明美、三枝延子、末松福江、関本芳子
高添美智子、近浦正治、保延　勇　（敬称略）

8．本遺跡の出土遺物および調査で得られたすべての記録については一括して敷島町教育委員会に保管してある。

凡　　例

1．本書の第 1 図は国土地理院発行の地形図(1：25,000)「甲府市北部」「韮崎」「甲府」「小笠原」の各一部分を用いて作成したものである。

2．遺物挿図中、断面が白抜きは土器・土師器・土師質土器で、■は須恵器、▒は陶器である。
また、土器の器面が▒は赤彩、■は黒色処理を表す。

3．図版中、遺構と遺物は縮尺が統一されていない。

本　文　目　次

序文
例言・凡例
第１章　遺跡をとりまく環境
1. 遺跡の立地と地理的環境 ……1
2. 御岳田遺跡とその周辺 ……1
第２章　遺構と遺物
1. 住居跡 ……4
2. 方形竪穴状遺構 ……9
3. 土坑 ……9
4. 溝状遺構 ……9
第３章　まとめ ……14
調査抄録

挿　図　目　次

第1図　御岳田遺跡と周辺の遺跡 ……2
第2図　御岳田遺跡第Ⅱ次調査区と遺構配置図 ……3
第3図　１号住居跡と出土遺物(1) ……4
第4図　１号住居跡出土遺物(2) ……5
第5図　２号住居跡と出土遺物 ……6
第6図　３号住居跡と出土遺物 ……7
第７図　４号住居跡と出土遺物(1) ……8
第８図　４号住居跡出土遺物(2) ……9
第９図　１号方形竪穴状遺構と出土遺物 ……10
第10図　１号土坑 ……10
第11図　１～３号溝状遺構と出土遺物 ……10
第12図　墨書土器 ……13

表　目　次

第１表　１号住居跡出土遺物観察表 ……11
第２表　２号住居跡出土遺物観察表 ……11
第３表　３号住居跡出土遺物観察表 ……11
第４表　４号住居跡出土遺物観察表 ……12
第５表　１号方形竪穴状遺構出土遺物観察表 ……12
第６表　１号溝状遺構出土遺物観察表 ……12
第７表　２号溝状遺構出土遺物観察表 ……12

写　真　図　版

図版１　調査区全景
図版２－１　１号住居跡
図版２－２　２号住居跡
図版２－３　３号住居跡
図版２－４　４号住居跡
図版２－５　１号方形竪穴状遺構
図版２－６　１号土坑
図版２－７　１・２号溝状遺構
図版２－８　３号溝状遺構
図版３　遺構内出土遺物（１～４号住、２号溝）

第１章　遺跡をとりまく環境

１．遺跡の立地と環境（第１図）

敷島町が所在する甲府盆地の北西部は、奥秩父の金峰山を源とし南流する荒川によって開析された北から南へと緩やかに傾斜した扇状地形を成している。この一帯の西側には、北西部にそびえる茅ヶ岳の裾部を形成するなだらかな赤坂台地が貢川と釜無川に挟まれるように南北に張り出して伸びており、JR 中央線付近において終息する。一方、北側はこの扇状地形の背後を担うように東西に大きく片山が跨り、さらに東側には千代田湖を挟んで尾根筋を南側へと進むと舌状に張り出した湯村山がある。

このように甲府盆地の北西部は、東西北部の三方が台地と山々によって「コ」字状に取り囲まれ、しかも盆地に向かって南向きに開口し、まるで天然の要害を形成するような特殊な地形を織り成している。

このうち荒川の右岸に位置する敷島町は、町域は南北約 17 km、東西約 4 km と南北に細長い町である。本町は大きく北部の山間地帯と南部の盆地部におおよそ大別されるが、町域のほぼ 8～9 割は標高 1,704 m を測る茅ヶ岳をはじめとする曲岳、太刀岡山などの山岳地帯や一部の丘陵からなっている。

一方、町南部は上述した荒川による扇状地上にあり、東はちょうど荒川右岸に面し、西は貢川を境として東西を河川で挟まれた南北に細長い格好を呈し、盆地北西部の一部に相当する。

以上、甲府盆地の北西部は中央に荒川が南流し、東西北部の三方を台地と丘陵に囲まれた特異な空間が形成されており、荒川右岸に位置する本町ではこのような地形をもとに様々な歴史的背景が垣間みられる。

２．御岳田遺跡とその周辺（第１・２図）

御岳田遺跡は、町南部の荒川によって形成された南北に延びる標高 287～289 m を測る微高地の東側にあたる。平成４年 12 月には、大型店舗の開発が契機となり、試掘調査がはじめて行われ第Ⅰ次調査がその翌年実施されている（第２図）。

第Ⅰ次調査では、約 1,500 ㎡の調査がおこなわれた結果、調査区内に満遍なく遺構が広がることが確認され、古墳時代の住居跡３軒（前期２軒、中期１軒）、平安時代の住居跡３軒や土坑群が発見された。

また、各時代の遺物をみると古墳時代(5 世紀代）の祭祀遺構とされる場所からは二重口縁を有する大型で完形の壺などがあり、このほか遺跡内の落込みから水晶の原石８点と水晶製丸玉未製品１点がまとまって出土していることから、玉造の工房跡が存在した可能性が指摘されている。平安時代には 10 世紀前半の住居跡１軒と 11 世紀前半の住居跡２軒などがあり、坏、皿、小皿、羽釜などの器種が豊富に出土している。

ここで周辺遺跡を概観すると、御岳田遺跡の南側には同じ微高地上に立地し隣接する金の尾遺跡⑧があり、弥生時代の集落と墓域、さらに環濠を有する遺跡である。1993～1994 年の第Ⅳ次調査では、弥生時代の集落遺跡のほかに遺跡の北部地域にかけて古墳時代前期集落跡が展開している可能性が指摘されている。

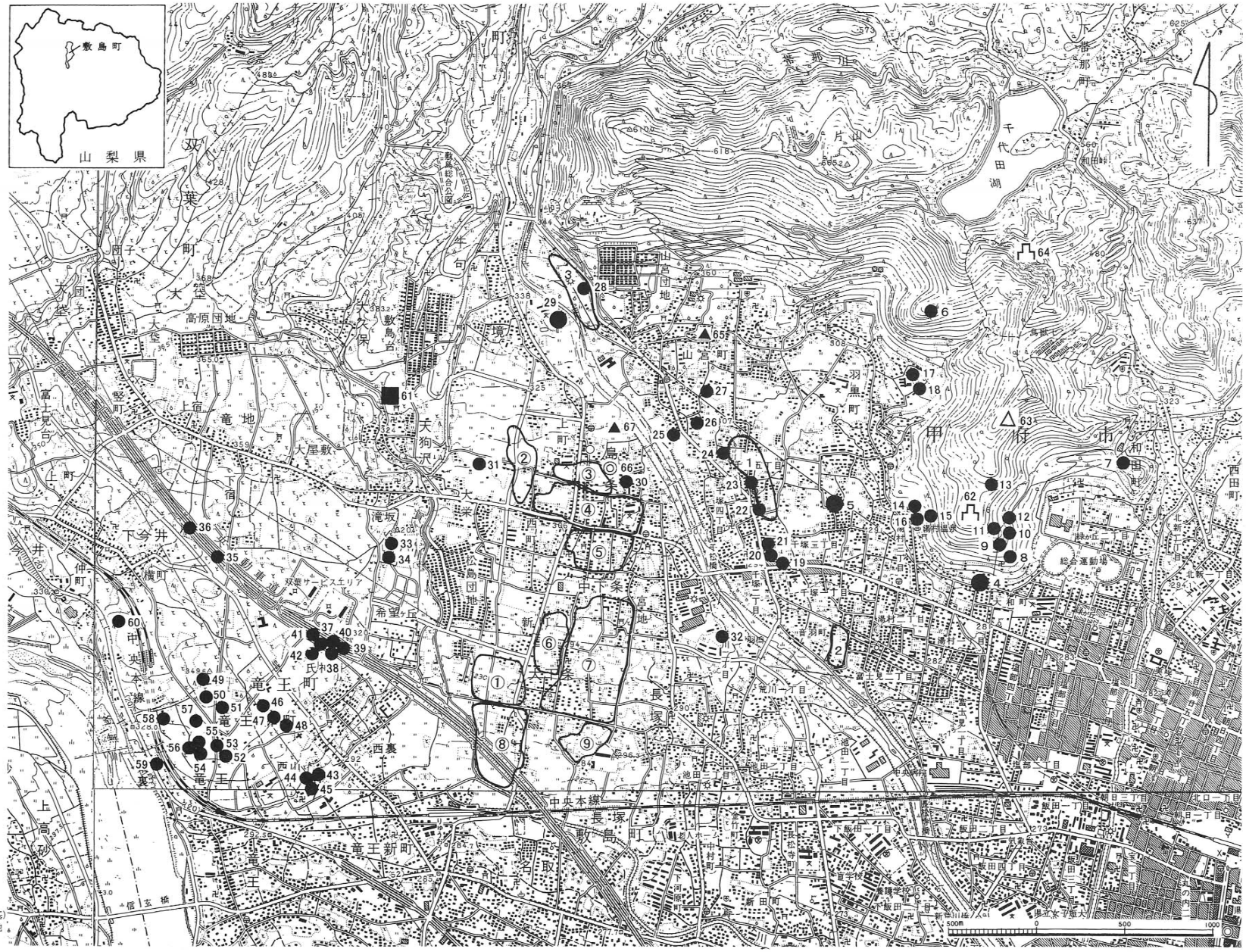
また、本遺跡から東側に近接して松ノ尾遺跡⑦があり、縄文時代から中世にかけての長期にわたる複合遺跡がある。これまでの調査で数多くの各時代の住居跡や土坑、掘立柱建物跡、竪穴状遺構などが確認されている。とくに古代についてみると出土する膨大な量の遺物には、墨書土器や須恵器、灰釉陶器をはじめとし、国産や中国産の陶磁器類、鍛冶関連遺物や鉄・銅製品などのほか、特殊なものには円面硯(4 個体分の破片)、腰帯(鉄製の鉸具２点、銅製の蛇尾１点）や金銅製小仏像２躯などがある。これらの状況から、当時の甲斐国において、重要な遺跡の一つではなかったかと推測されている。

本遺跡の過去の調査状況と周辺遺跡について概観してきたが、今回報告する第Ⅱ次調査は、上述した第Ⅰ次調査地点から東側の南北に走る県道敷島・田富線を挟んで南東へ約 70 m の地点となる。

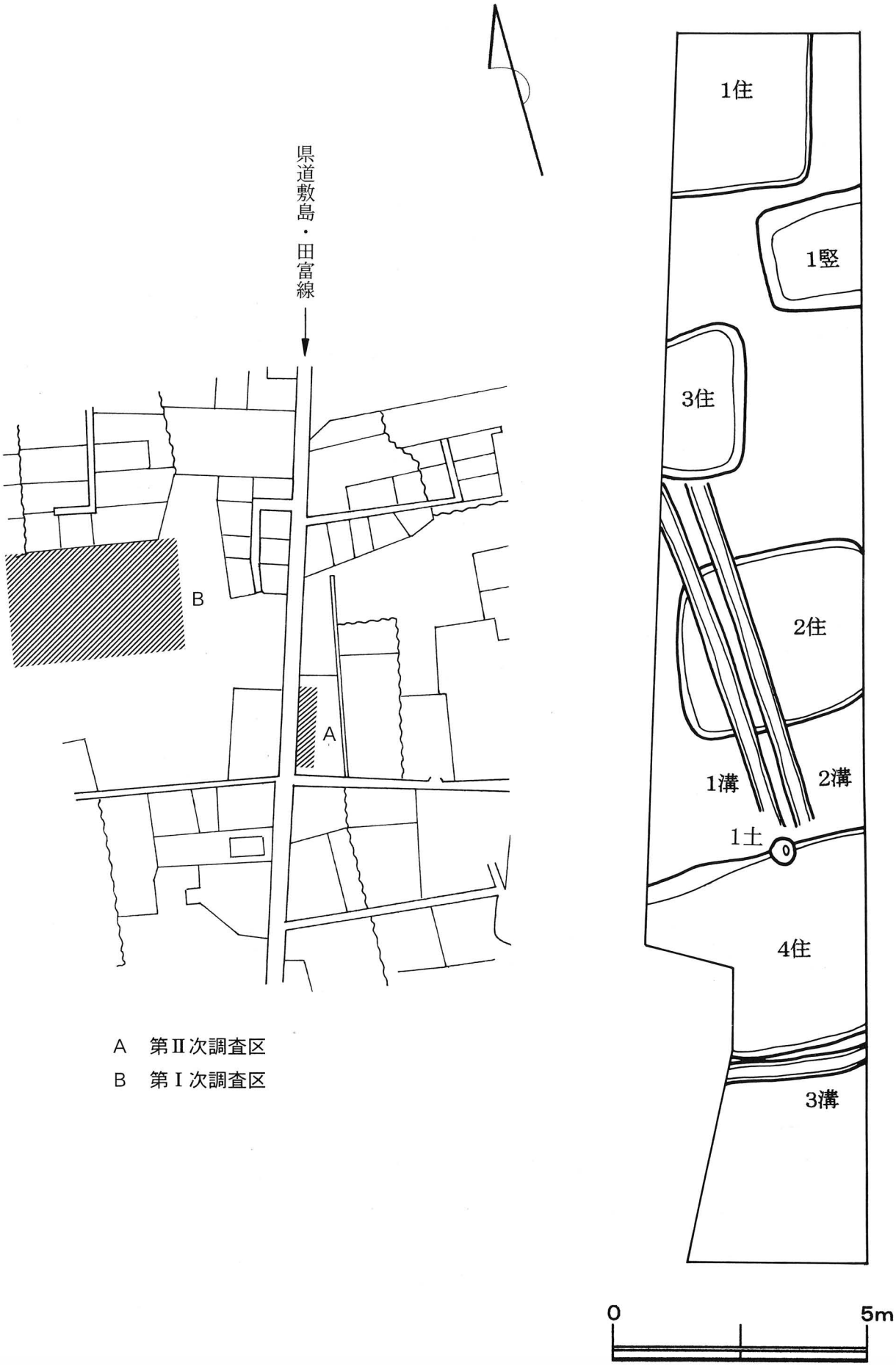
以下、第Ⅱ次調査で発見された各遺構と出土遺物についてみていきたい。

① 御岳田
② 原腰
③ 山宮地
④ 村縋
⑤ 不動ノ木
⑥ 三昧堂
⑦ 松ノ尾
⑧ 金の尾
⑨ 末法

1 模田
2 音羽
3 米草
4 万寿森古墳
5 加牟那塚古墳
6 おてんくさん古墳
7 三光寺山古墳
8 湯村山１号古墳
9 湯村山２号古墳
10 湯村山３号古墳
11 湯村山４号古墳
12 湯村山５号古墳
13 湯村山６号古墳
14 大平１号古墳
15 大平２号古墳
16 塩沢寺裏無名墳
17 大塚古墳
18 無名塚古墳
19 薬師塚古墳
20 証文塚古墳
21 凧塚古墳
22 猪塚古墳
23 無名２号墳
24 子泣塚古墳
25 無名１号墳
26 天神塚古墳
27 天塚古墳
28 米草古墳
29 大塚古墳
30 大庭古墳
31 狐塚古墳（敷島町）
32 穴場古墳
33 双葉１号墳
34 往生塚古墳
35 双葉２号墳
36 狐塚古墳（双葉町）
37 竜王１号墳
38 竜王２号墳
39 竜王３号墳
40 二ツ塚１号墳
41 二ツ塚２号墳
42 へび塚
43 西山１号墳
44 西山２号墳
45 西山３号墳
46 狐塚１号墳
47 狐塚２号墳
48 狐塚３号墳
49 中秋塚
50 丸山古墳
51 四ツ石塚
52 形部塚１号墳
53 形部塚２号墳
54 両目塚１号墳
55 両目塚２号墳
56 両目塚３号墳
57 両目塚４号墳
58 両目塚５号墳
59 片瀬塚
60 双葉３号墳
61 天狗沢瓦窯
62 湯村山城
63 法泉寺山烽火台
64 和田城山
65 山之神遺跡（五輪塔１基）
66 土屋惣蔵昌恒館跡推定地
67 慈徳院五輪塔



第１図　御岳田遺跡と周辺の遺跡



A　第Ⅱ次調査区
B　第Ⅰ次調査区

第２図　御岳田遺跡第Ⅱ次調査区と遺構配置図

第2章　遺構と遺物

今回は約100㎡の調査面積であったにもかかわらず、住居跡4軒、方形竪穴状遺構1基、土坑1基、溝状遺構3条が確認され、第Ⅰ次調査の結果からみても遺構密度が非常に高い遺跡であることが明らかとなってきた。

1．住居跡

a．1号住居跡（第3・4図、図版2－1、3）

位置・概要　調査区内の北東部に位置している。北壁と西壁は調査区外となるため確認できなかった。

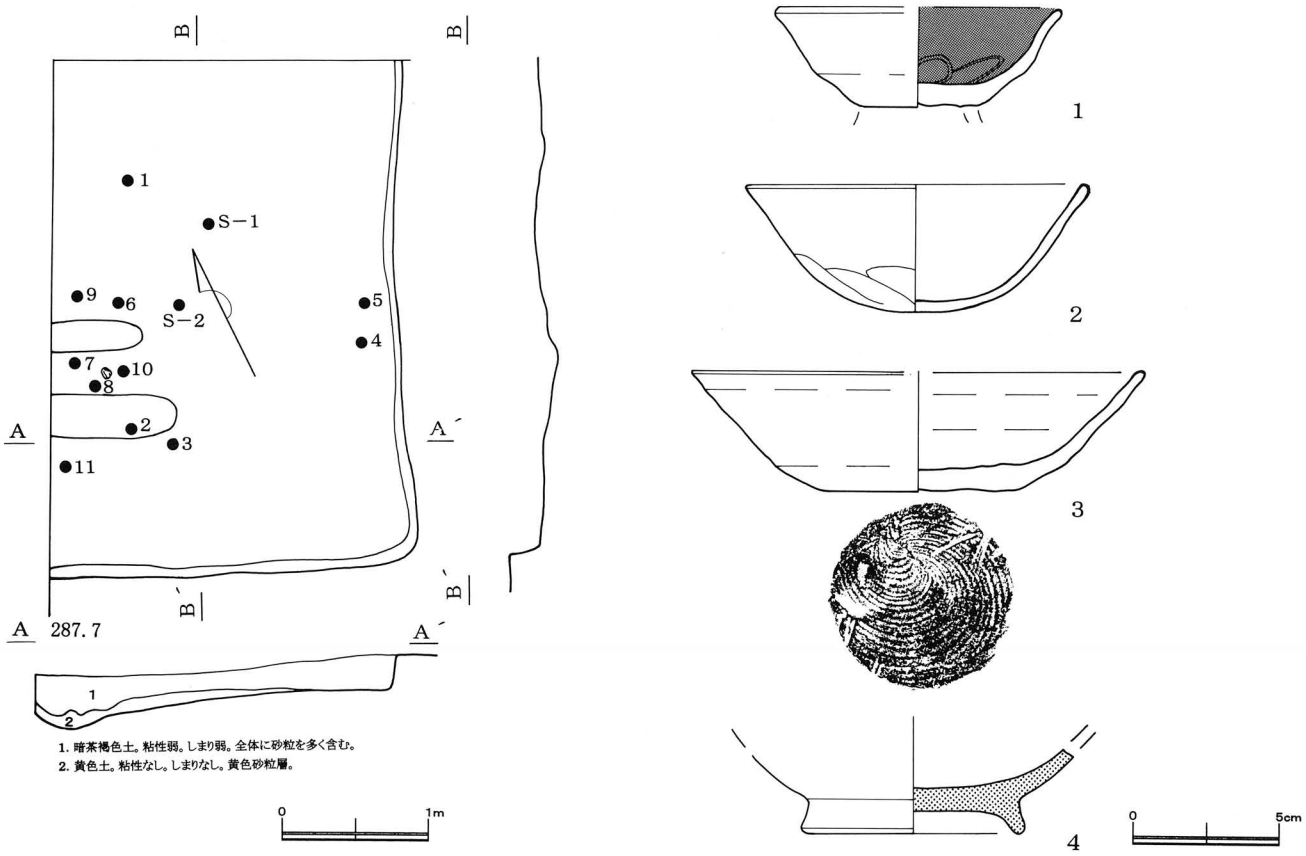
形状・規模　平面形は方形を呈すとみられ、現存で東西約2.5 m、南北約2.8 mを測る。壁はほぼ垂直に立ちあがり、高さ20～25 cmを測る。柱穴等は確認されなかった。

カマド　住居跡の西側南寄り、ちょうど調査区西壁の際で確認されている。袖幅約20～25 cmを測り、中央には支脚として使用されたとみられる長さ17 cm、幅8 cm、厚さ7 cmの円柱状の支柱石が据えられていた。

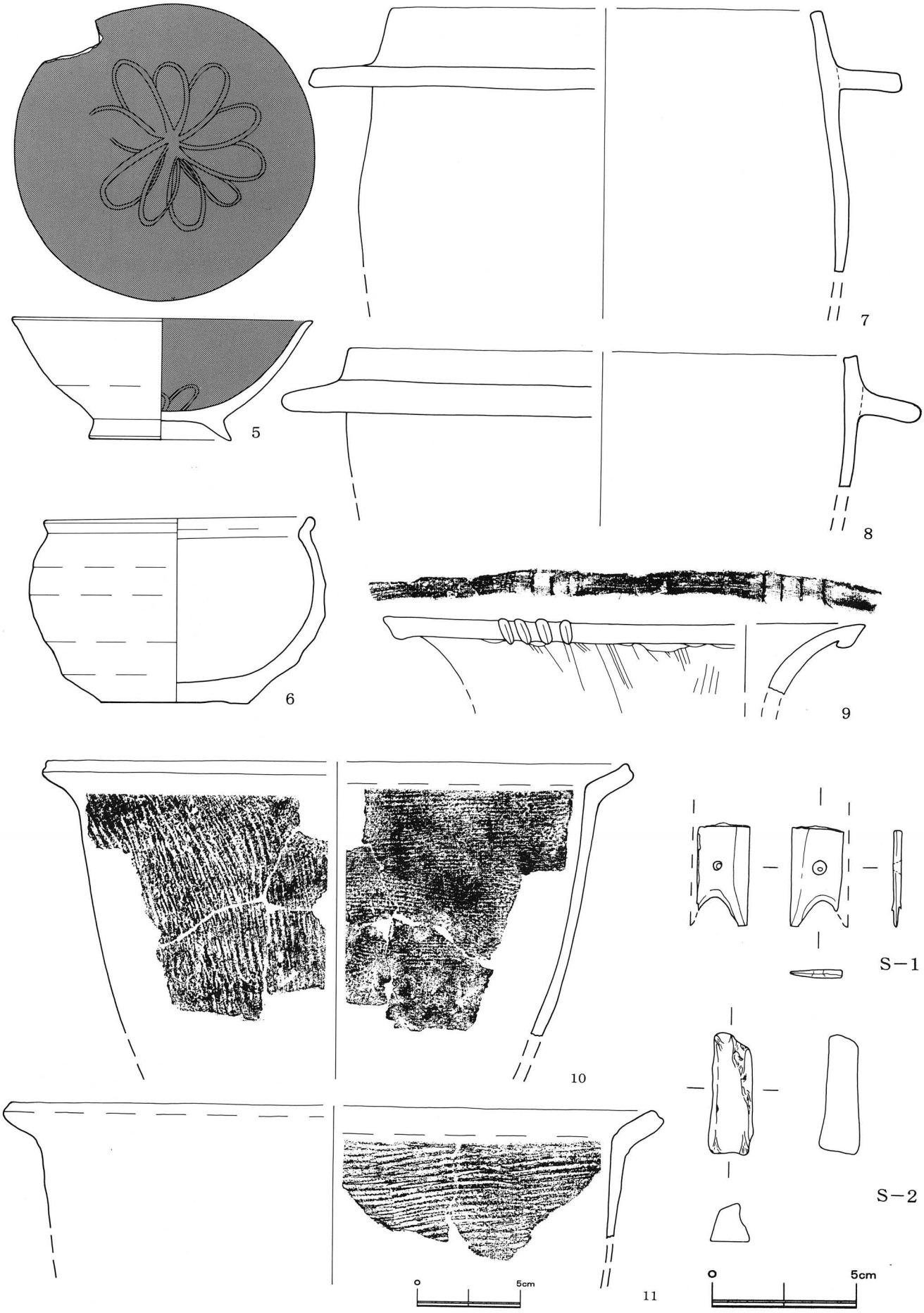
遺物　カマドの付近を中心として、多くの遺物が出土している。1は内側に暗文が施された高台付きの坏で、住居跡の床面上からの出土である。2～5は坏類で、このうち4は灰釉陶器碗で、5は高台付きの坏である。

2・3はカマドのすぐ脇にあり、4・5は覆土中であるが東壁に近い場所から共にまとまって出土している。6は鉢で、7・8は羽釜である。6～9はカマドを中心に分布し、とくに7・8はカマドの内部からの出土である。10・11は甕でこれらもカマド付近から出土している。

石器は磨製石鏃(S－1)1点、砥石(S—2)1点が覆土中から出土している。



第3図　1号住居跡と出土遺物（1）



第４図　１号住居跡出土遺物（2）

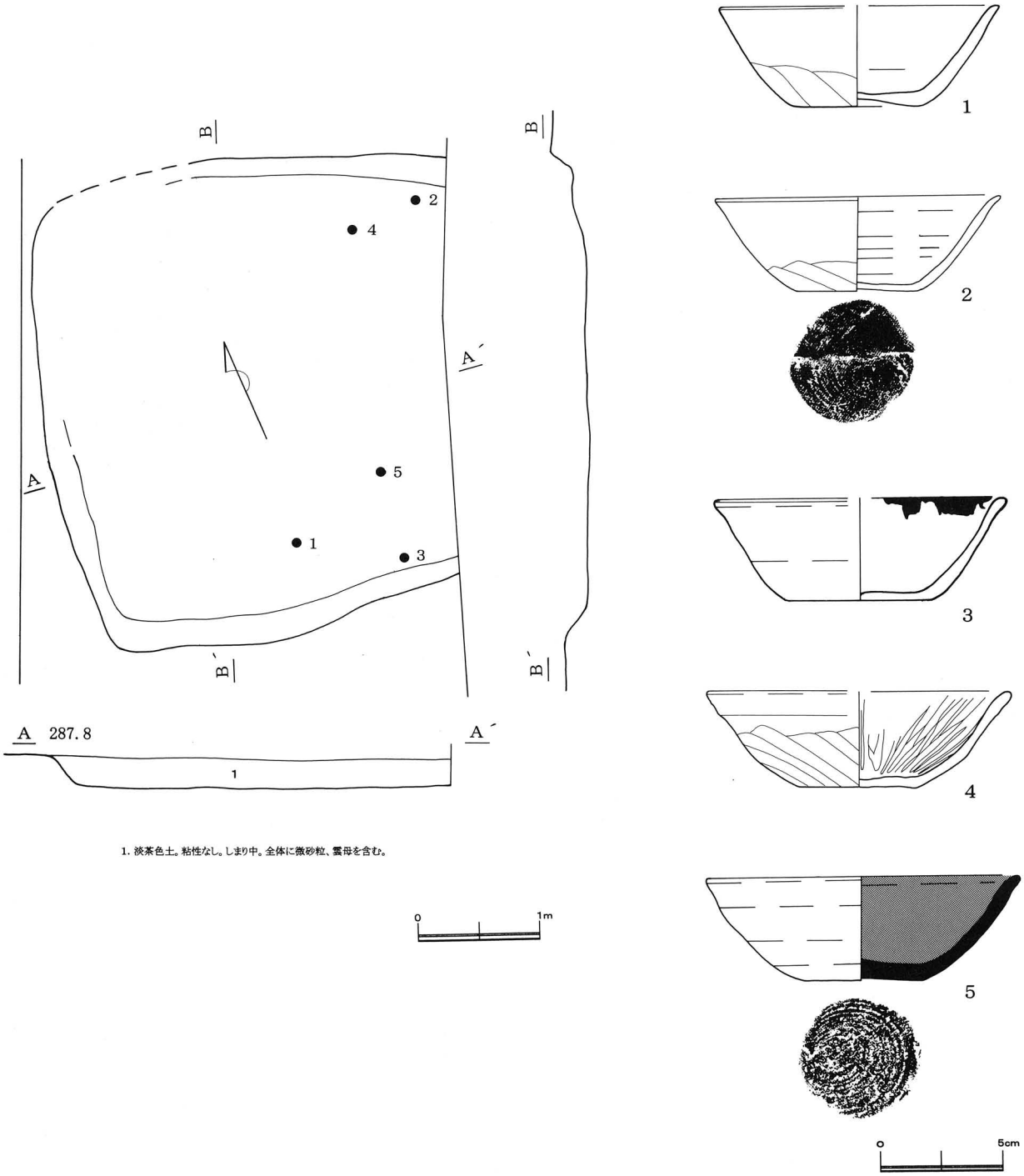
b．２号住居跡（第５図、図版２－２、３）

位置・概要　調査区の中央に位置し、東側は調査区外となっている。住居跡のほぼ中央付近は南北に併走する１・２号溝によって切られている。このため、北西部のコーナー壁は確認できなかった。

形状・規模　南北約 3.7 m、東西は確認可能な範囲で約 3.5 m を測り、平面形は方形を呈していたと考えられる。壁は緩やかに立ち上り、高さ約 20～25 cm を測る。柱穴等はみられない。

カマド　確認されなかったが、住居跡の東側が調査区外となっていることから、東壁にカマドが設けられていた可能性もある。また、北壁中央からやや東寄りには直径約 40 cm の焼土のまとまりがみられた。

遺物　1～5 は坏類で、住居跡東側の南・北２箇所に偏在する。２は北壁に近接した床面上から出土している。



第５図　２号住居跡と出土遺物

c．３号住居跡（第６図、図版２－３、３）

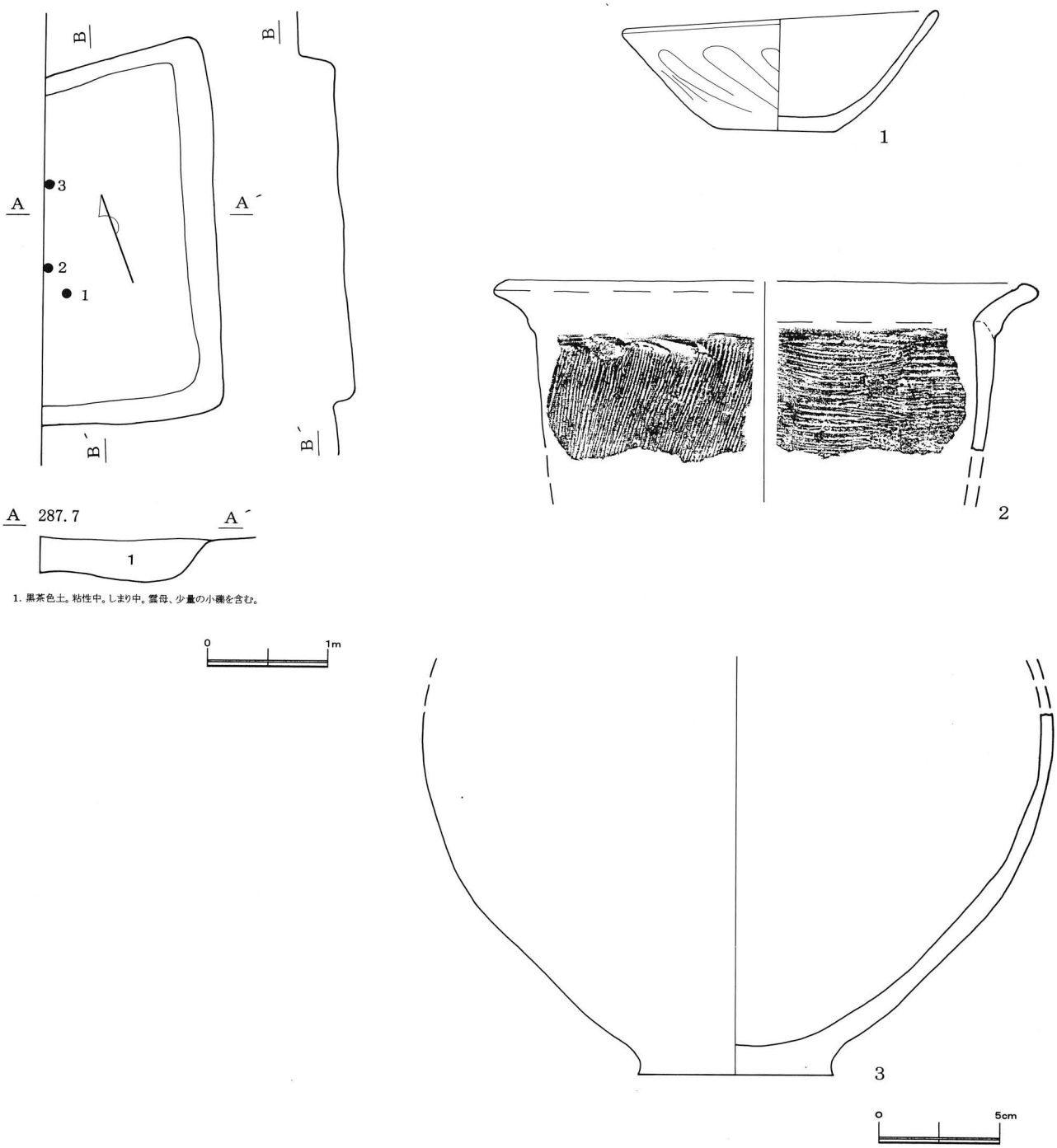
位置・概要　調査区の中央からやや北側に位置し、住居跡の西側は調査区外となっている。

形状・規模　住居跡東側の南・北コーナーの形状から平面形はおそらく方形を呈するとみられ、調査で確認できた東西の規模は約 1.5 m、南北は約 3.0 m を測る。本来は一辺約 3.0 m を測る方形で小型の住居跡であった可能性がある。壁は直立気味に緩やかに立ち上がり、高さ約 30 cm を測る。

柱穴等は確認されていない。

カマド　確認されなかった。

遺物　住居跡のほぼ中央付近にまとまって出土している。1 は坏、2 は甕、3 は壷である。このうち、3 は古墳時代の壺の下半部とみられる。



第６図　３号住居跡と出土遺物

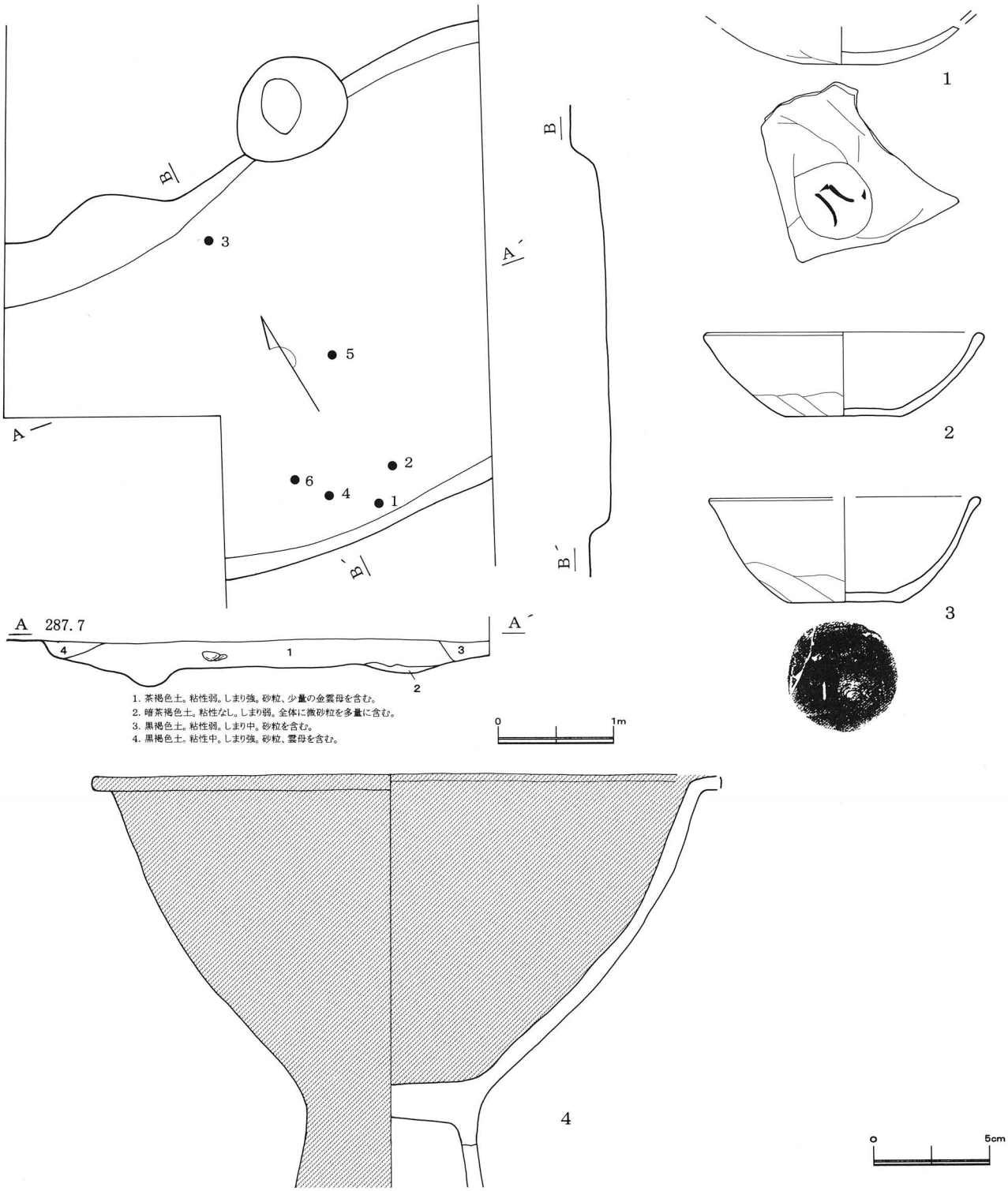
d．４号住居跡（第７・８図、図版２－４、３）

位置・概要　調査区の南側に位置する。住居跡の東側と西側は調査区外となっている。北壁東寄りには１号土坑が本住居跡を切るように重複している。

形状・規模　平面形は不明であり、東西は確認可能な範囲内で約 4.5 m、南北は約 4.0 m を測る。壁は緩やかに立ちあがり、高さ約 20 cm を測る。柱穴等は確認されていない。

カマド　確認されなかった。住居跡の東側が調査区外にあるため、東壁に設けられていた可能性もある。

遺物　１は皿、２・３は坏類、５・６は須恵器の甕である。１・２・６は比較的住居跡の南壁に近い場所にあり、６は住居跡の床面上から出ている。４は、弥生時代の赤彩された大型高坏の坏部とみられる。



第７図　４号住居跡と土遺物（1）

第８図　４号住居跡出土遺物（2）

２．方形竪穴状遺構（第９図、図版２－５）

調査区内の北側に位置し、確認可能な範囲で東西約 2.0 m、南北約 2.3 m を測る。壁は緩やかに立ち上がり、深さ約 40 cm ある。床面は多少凹凸がみられる。遺構からは、皿１が出土している。

３．土坑（第10図、図版２－６）

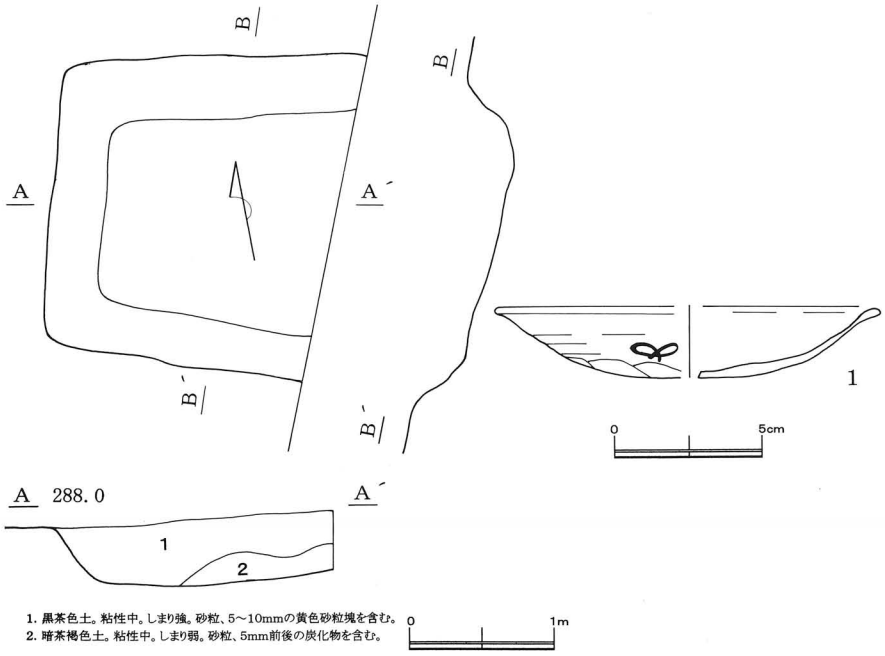
調査区の南よりにあり、４号住居跡と重複している(1 号土坑)。大きさは、長軸約 90 cm、短軸約 80 cm の楕円形を呈し、深さ約 60 cm の掘り込みをもつ。遺物等はとくに無いため、住居跡との時期的な前後関係は不明である。

４．溝状遺構（第11図、図版２－７・８）

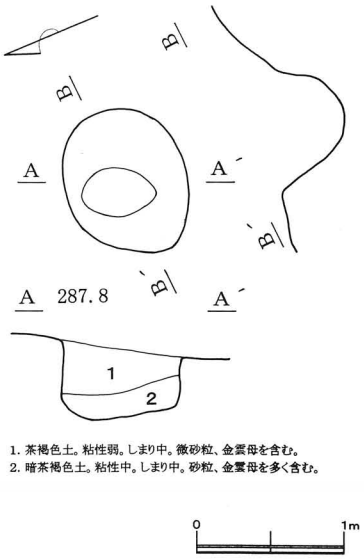
ａ．１号溝状遺構：調査区のほぼ中央に位置し、２号溝状遺構と併行している。確認可能な範囲は、長さ約 7.0 m、幅約 50 cm を測る。この溝内から、坏１が出土している。

ｂ．２号溝状遺構：調査区のほぼ中央に位置し、１号溝状遺構と併行している。確認可能な範囲は、長さ約 7.7 m、幅 0.4～0.6 m、深さ約 40 cm を測る。溝内からは、土師質土器の小皿「かわらけ」が出土している。

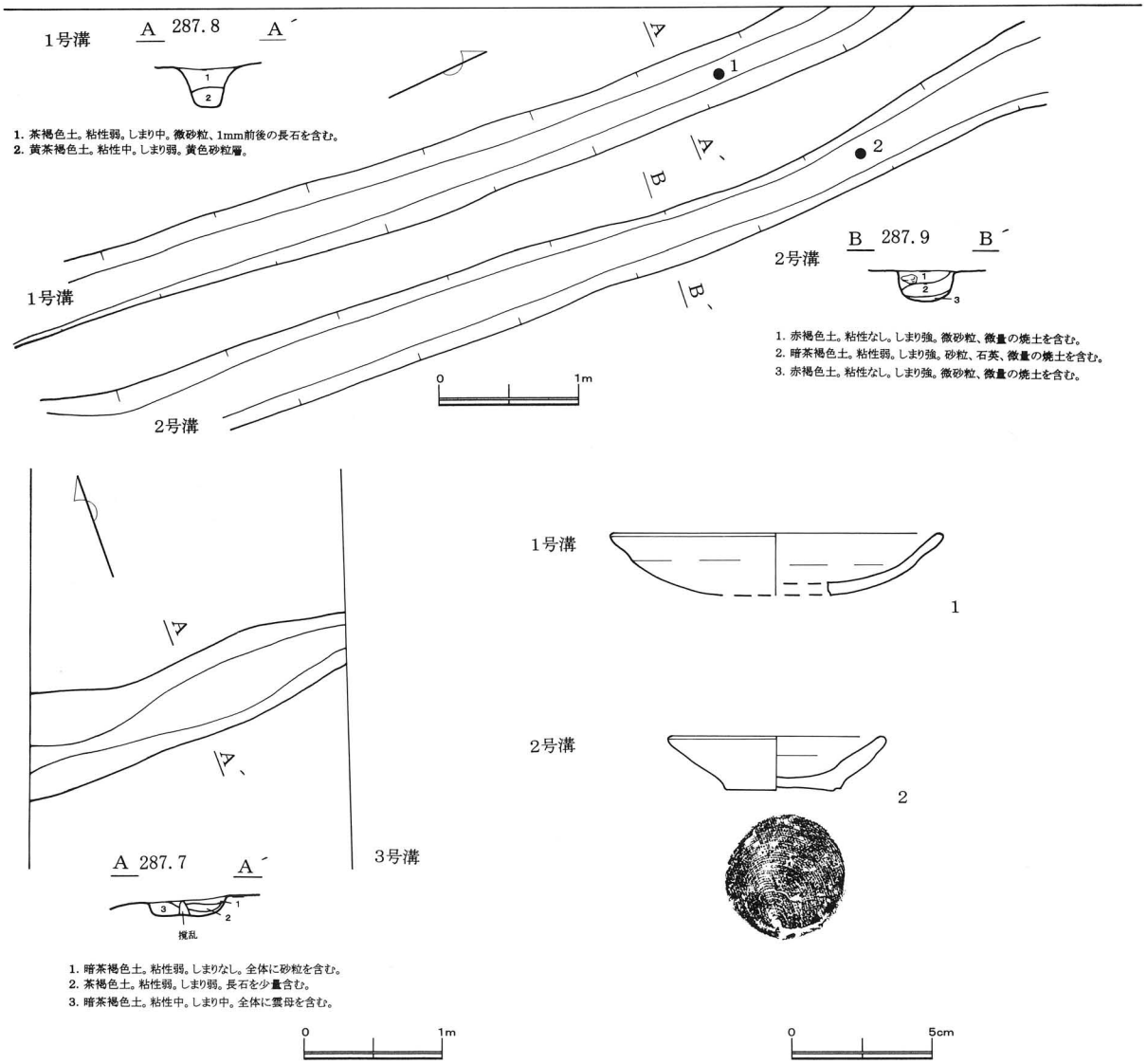
ｃ．３号溝状遺構：調査区の南側にあり、４号住居跡と隣接している。確認可能な範囲は、長さ約 2.7 m、最大幅約 1.2 m を測る。



第 9 図　1 号方形竪穴状遺構と出土遺物



第 10 図　1 号土坑



第 11 図　1～3 号溝状遺構と出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形・技法の特徴
1	土師質土器	高台付坏	器高 3.5 cm 口径 9.7 cm 底径 4.2 cm	金雲母を多く含む	内面 黒色 外面 暗茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内黒土器。 内面底部に花弁状暗文が施される。 高台部欠損。
2	土師器	坏	器高 4.2 cm 口径 11.5 cm 推定底径 4.2 cm	赤色粒子を含む	内面 暗茶色 外面 茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 外面体部ヘラ削り。底部欠損。
3	土師質土器	坏	器高 4.2 cm 推定口径 15.4 cm 底径 6.8 cm	金雲母を多く含む	暗茶褐色	良好	外面体部及び底部に煤付着。 底部糸切痕。 ロクロ右回転。
4	灰釉陶器	埦	底径 7.7 cm	キメ細かく硬質	明灰色	良好	内面体部に淡緑色の釉付着。 台部横ナデ仕上げ。
5	土師質土器	高台付坏	器高 6.0 cm 口径 14.5 cm 底径 7.2 cm	金雲母を多く含む	内面 黒色 外面 茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内黒土器。 内面底部に花弁状暗文が施される。 外面底部糸切痕。貼付高台。
6	土師質土器	鉢	器高 9.3 cm 口径 12.8 cm 底径 7.2 cm	金雲母を多く含む	暗茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 体部に複数の稜線を持つ。
7	土師器	羽釜	推定口径 20.2 cm	長石、金雲母を含む	茶褐色	良	口辺部及び鍔部横ナデ仕上げ。 内面横方向のハケ目。 外面胴部縦方向のハケ目。
8	土師器	羽釜	推定口径 23.6 cm	長石、金雲母を含む	茶褐色	良	口辺部及び鍔部横ナデ仕上げ。 内面横方向のハケ目。 外面胴部縦方向のハケ目。
9	土師器	壷	推定口径 22.9 cm	キメ細かい	内面 橙褐色 外面 淡茶色	良	口縁部に縦四条の棒状貼付装飾を持つ。 内面に朱付着。折り返し口縁の一部に指頭痕有り。 外面頸部縦方向のハケ目。
10	土師器	甕	推定口径 28.2 cm	長石、金雲母を含む	明茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 外面胴部縦方向のハケ目。 内面横方向のハケ目。
11	土師器	甕	推定口径 31.2 cm	長石、金雲母を含む	明茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 内面横方向のハケ目。
S−1	石器	磨製石鏃	現存長 3.5 cm	石材 粘板岩			中央部に直径2mmの円孔を持つ。
S−2	石器	砥石	現存長 4.3 cm	石材 石英岩			

第１表　１号住居跡出土遺物観察表

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形・技法の特徴
1	土師器	坏	器高 4.25 cm 口径 11.8 cm 底径 5.3 cm	キメ細かい	淡茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 外面体部ヘラ削り。 底部糸切痕。ロクロ右回転。
2	土師器	坏	器高 4.1 cm 口径 11.9 cm 底径 5.2 cm	キメ細かく緻密	淡茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 外面体部ヘラ削り。 底部糸切痕。
3	土師器	坏	器高 4.3 cm 口径 12.2 cm 底径 6.2 cm	キメ細かく緻密	内面 淡茶色 外面 淡茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面口縁部に 灯明煤付着。外面体部ヘラ削り。 底部ヘラ整形。
4	土師器	坏	器高 3.8 cm 推定口径 12.6 cm	キメ細かく緻密	褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。外面体部ヘラ削り後、 縦方向のハケ目。内面に放射状暗文有り。 底部ヘラ整形。
5	須恵器	坏	器高 4.4 cm 口径 13.2 cm 底径 5.1 cm	キメ細かく緻密	内面 黒色 外面 灰茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 底部糸切痕。

第２表　２号住居跡出土遺物観察表

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形・技法の特徴
1	土師器	坏	器高 5.3 cm 口径 13.1 cm 底径 4.6 cm	小礫，金雲母 を少量含む	淡茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 内面全体に煤付着。 外面体部及び底部ヘラ整形。
2	土師器	甕	推定口径 21.4 cm	小礫，長石、 金雲母を少量含む	内面 茶褐色 外面 暗茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 内面口辺部から胴部にかけて横方向のハケ目。 外面胴部縦方向のハケ目。
3	土師器	壷	底径 8.2 cm	小礫，金雲母 を少量含む	淡茶色	良	外面胴部下半縦方向のハケ目。

第３表　３号住居跡出土遺物観察表

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形・技法の特徴
1	土師器	皿	底径 3.75 cm	キメ細かい	茶褐色	良	外面底部に墨書有り。 外面体部及び底部ヘラ削り。
2	土師器	坏	器高 3.7 cm 口径 12.0 cm 推定底径 5.0 cm	キメ細かく緻密	淡茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 外面体部及び底部ヘラ削り。
3	土師器	坏	器高 4.6 cm 推定口径 11.6 cm 底径 5.0 cm	キメ細かく緻密	明茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 外面体部ヘラ削り。 底部糸切後、ヘラ整形。(僅かに糸切痕が残る)
4	弥生土器	高坏	推定口径 30.2 cm	キメ細かく緻密	茶褐色	良	口縁部は大きく外反する。 内・外面体部横方向のヘラ磨き。 外面体部下半縦方向のヘラ磨き。
5	須恵器	甕	器高 16.1 cm 推定口径 24.5 cm 推定口径 7.0 cm	キメ細かく緻密 長石を含む	茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。
6	須恵器	甕		キメ細かく緻密	内面 灰色 外面 暗緑色	良好	外面に深緑色の釉付着。 外面平行叩き目。内面叩き具痕有り。

第４表　４号住居跡出土遺物観察表

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形・技法の特徴
1	土師器	皿	器高 2.4 cm 推定口径 13.0 cm 推定底径 4.0 cm	キメ細かく緻密	橙褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。 外面体部に墨書有り。 外面体部斜め方向のヘラ削り。

第５表　１号方形竪穴状遺構出土遺物観察表

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形・技法の特徴
1	土師器	皿	推定口径 11.8 cm	キメ細かい	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 内面放射状暗文。

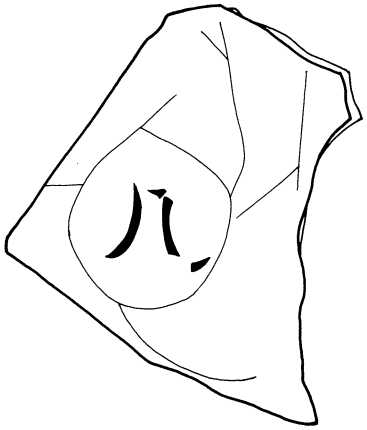
第６表　１号溝状遺構出土遺物観察表

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形・技法の特徴
1	土師質土器	小皿 (カワラケ)	器高 2.0 cm 口径 7.5 cm 底径 4.2 cm	キメ細かく緻密	橙褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 底部糸切痕。

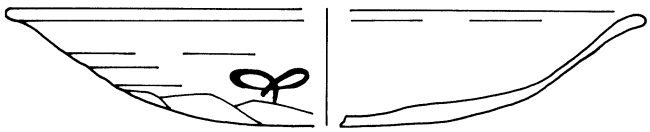
第７表　２号溝状遺構出土遺物観察表

1号住居
外面体部

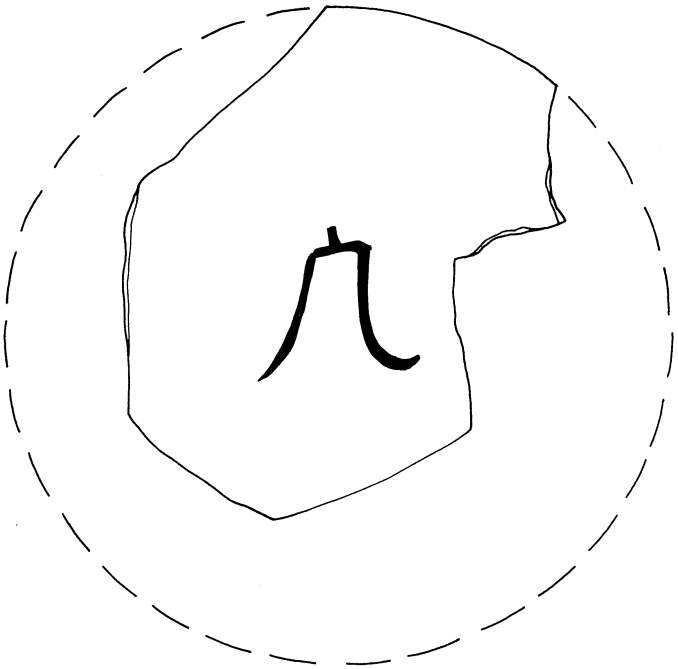
4号住居
外面底部



4号住居
外面底部「八」



1号方形竪穴状遺構
外面体部



遺構外遺物
外面底部「八」

第12図　墨書土器

第3章　ま　と　め

以上みてきたように、今回の第Ⅱ次調査では調査面積が約100㎡というわずかな範囲であったが、平安時代の住居跡4軒、方形竪穴状遺構1基、溝状遺構3条、土坑1基が発見され、遺構密度の高い地点であることが判明した。

≪発見された遺構について≫

住居跡：各住居跡の時期については、およそ以下のとおりと考えられる。

1号住居跡	10世紀後半から11世紀前半	3号住居跡	10世紀前半
2号住居跡	9世紀後半	4号住居跡	10世紀前半

このように、今回主に平安時代の前半に相当する住居跡がみつかった。

冒頭でみたように、御岳田遺跡の第Ⅰ次調査区では、該期の住居跡は3軒が発見されている。この3軒中1軒以外は土師質土器を伴い平安時代後半（主に10世紀末～11世紀前半頃）に所属するものであり、そして竪穴状遺構や土坑などの覆土中、また遺構外から出土した遺物についても土師質の坏、小皿、脚高高台坏、小埦、羽釜などをはじめとする後半期のものが比較的多く出土している。

このような第Ⅰ次調査の平安時代における傾向は、今回の第Ⅱ次調査区では様相を異としており、むしろ平安時代前半(9～10世紀）が主体となって確認された。

溝状遺構：第Ⅱ次調査区の中央から2条の溝状遺構が発見された。1号と2号は共に伴走するようにあり、1号溝状遺構からは土師器皿が、2号溝状遺構からは底部糸切り痕のみられる土師質の小皿「カワラケ」が出土した。これら2条の溝状遺構は位置関係からも相関関係にある遺構とみられ、1号溝状遺構には土師器皿が出土しているが、平安時代の2号住居跡などを切っている関係と2号溝状遺構より出土した「カワラケ」から、これらの溝状遺構の所属時期は中世後半(15～16世紀）ではないかと推測される。

3号溝状遺構は、1・2号溝状遺構との関連が考えられるが、とくに出土した遺物はなく詳細は不明である。

≪出土遺物について≫

4号住居跡から赤彩された高坏4が出土し、また3号住居跡からも壺の下半部が出土しているが、これらに関連するような弥生・古墳時代の遺構は今回確認されていない。

また、1号住居跡からは高台を有する金色雲母を多く含んだ坏1・5や鉢6などが出土した。小皿等はみられないことや10世紀後半代の坏が伴うことから、1号住居跡については上記で示した時期を考慮した。

中でも、坏1・5は内面が黒色処理され、見込み部を中心に花弁状の暗文が施されていることが特徴である。このような土器は、町内の遺跡では松ノ尾遺跡で出土している。また、鉢6については平安時代末葉の土師質土器と同様な胎土をもつことが特徴である（図版3)。更に、出土した遺物には坏や皿に文字の書かれた墨書土器があり（第12図)、2号住居跡の坏3などの内面にはタール状の付着物がみられるものもある。

敷島町の南部は荒川の扇状地となっているが、おおよそ南北に2本の微高地が形成されている。そして、御岳田遺跡はこの扇状地の西側南北に走る微高地上に立地しており、ちょうど本遺跡の南側に隣接する金の尾遺跡もまた同じ微高地上にある。しかし、今回は壺・高坏などの弥生、古墳期の遺物はみられたが、遺構の発見までには至っておらず、第Ⅱ次調査地点周辺では、金の尾遺跡でみられるような同時期の集落の展開はかなり希薄なものとなることが窺える。

一方、本遺跡から東側に近接する松ノ尾遺跡は、また別な微高地上に立地する遺跡であることから、本遺跡の平安時代の集落跡は、松ノ尾遺跡とはまた異なる集落となることが推測される。

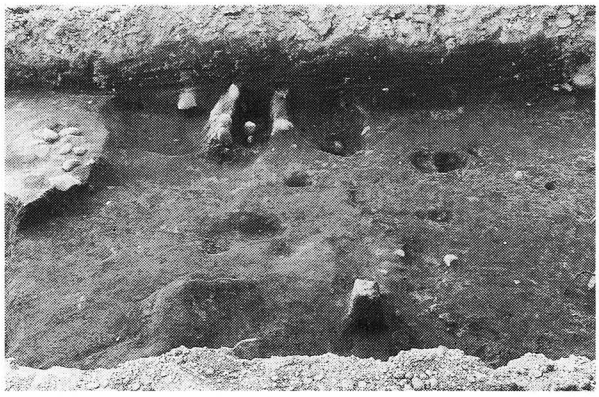
以上、御岳田遺跡第Ⅱ次調査の概要についてみてきたが、本遺跡の性格についてはまだ調査件数が少なく漠然としたものとなっている。今後も、鋭意調査を積み重ね本遺跡の位置付けをおこなっていきたい。

参考文献

大嶌正之　1996　「松ノ尾遺跡」　敷島町教育委員会
大嶌正之　1999　「御岳田遺跡」　敷島町教育委員会

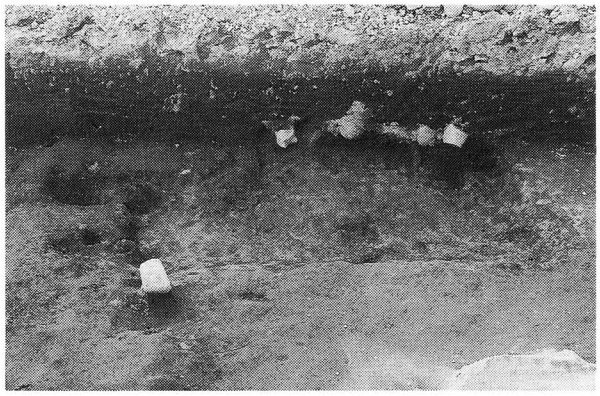
調査区全景

図版 2

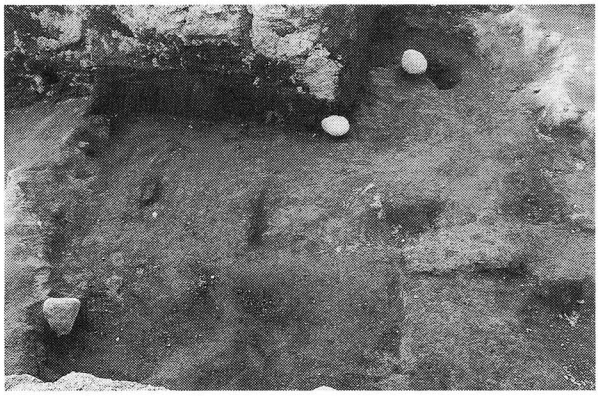


1. 1号住居跡

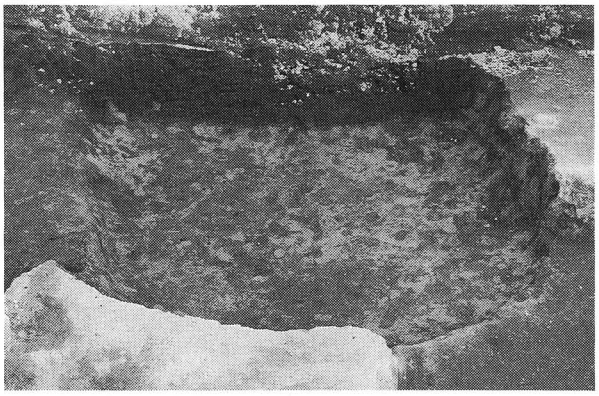
2. 2号住居跡



3. 3号住居跡

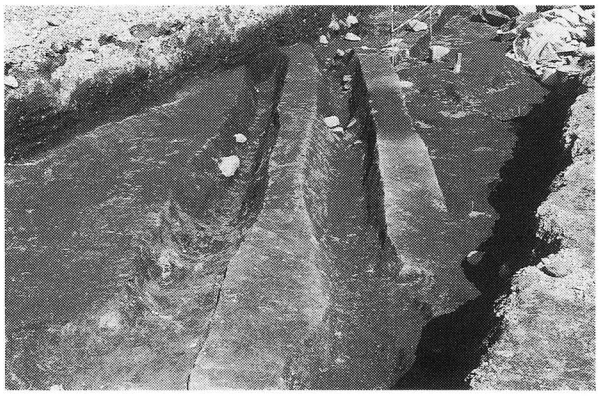


4. 4号住居跡



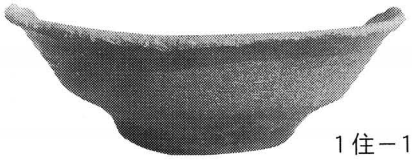
5. 1号方形竪穴状遺構

6. 1号土坑

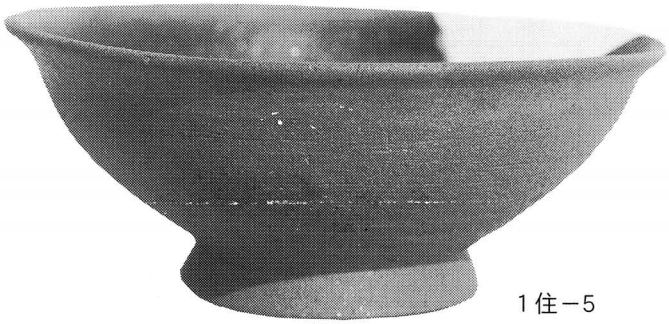


7. 1・2号溝状遺構

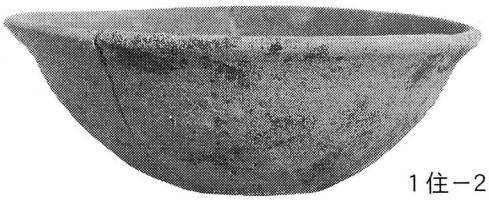
8. 3号溝状遺構



1住－1

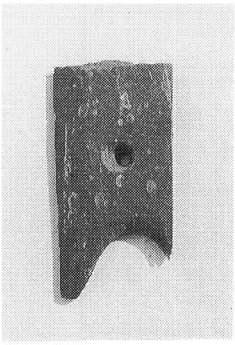


1住－5

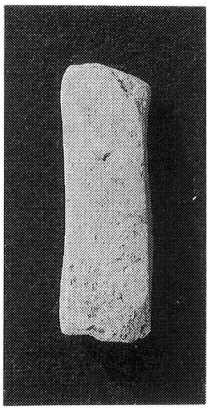


1住－2

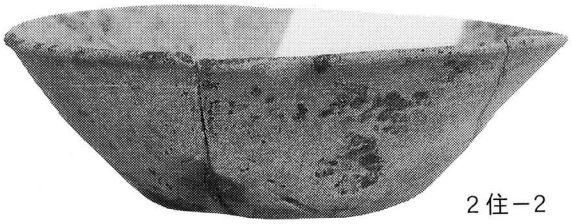
1住－6



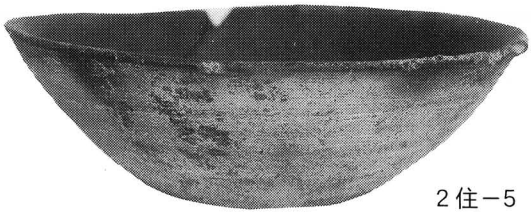
1住S－1



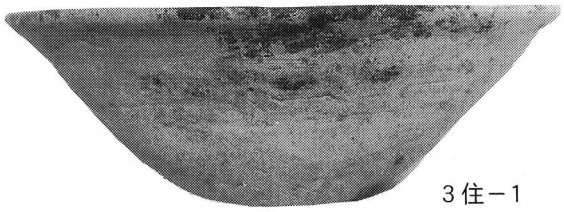
1住S－2



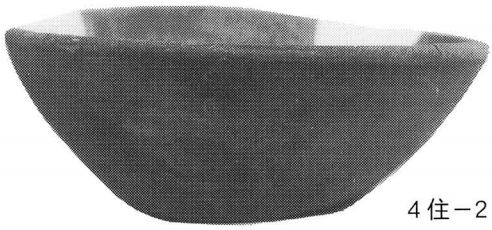
2住－2



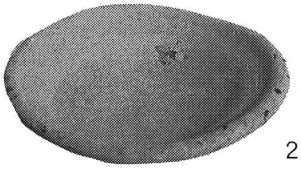
2住－5



3住－1



4住－2



2号溝

報告書抄録

ふりがな	みたけだいせき
書名	御岳田遺跡 Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	敷島町文化財調査報告書
シリーズ番号	22
編著者名	大嶌正之・小坂隆司
編集機関	敷島町教育委員会
所在地	〒400-0123 山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020
発行年月日	平成16年5月25日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
御岳田遺跡	山梨県 中巨摩郡 敷島町大下条 968－3	193928	6			平成8年 10月15日 ～同年 10月21日	100	民間店舗 建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
御岳田遺跡	集落跡	平安時代 中世	住居跡 竪穴遺構 溝状遺構	土師器 石器	

敷島町文化財調査報告　第22集
御岳田遺跡 Ⅱ
発行日　2004年(H16) 5月25日
発　行　敷島町教育委員会
山梨県中巨摩郡敷島町島上条 1020
TEL(055)277－4111
印　刷　㈲協和印刷社